

コナン・ドイルの「失われた民族誌」とアンダマン表象

中村忠男

あとには犬頭人のうつろな笑い声が、あたかも犬の遠吠えのごとく、
いつまでも悲しげにひびくのだった。

澁澤龍彦、『高丘親王航海記』

民族誌写真と虚構の仮面

1887年の『緋色の研究』で誕生して以来、シャーロック・ホームズは演劇や映画、テレビなど様々なメディアを通して絶えることなく映像化されてきた。そうした傾向は現代もなお続いているが、全60編に及ぶ彼の登場作品は必ずしもまんべんなく作品化されたわけではない。とりわけ『緋色の研究』と『四つの署名』（1890年）の初期二作品の場合、原作執筆当時の社会的通念が物語の骨組みを構成しているため、20世紀に入ってそのまま映画化することが難しく、サイレント時代の作品を除くと、いずれも1930年代初頭に1本の映画が制作されたにすぎなかった。この点では、英グラナダ放送で制作されたテレビ・シリーズ『シャーロック・ホームズの冒険』（1984-94年）は、きわめて画期的な試みといわざるをえない。主役のジェレミー・ブレットが95年に死去したため、最終的には41編が放映されたにすぎないが、初期2作品を含めた全作品の映像化が検討されていたからである。また作品の質についても、原作の雰囲気や忠実に再現することに成功しており、一般視聴者だけではなく、シャーロキアンと呼ばれるマニアによっても高く評価される出来映えとなっている。

とはいえ、ヴィクトリア朝時代の平均的な白人中産階級男性の世界観をそのまま1980年代後半のマスメディアで反復することが許されるはずもなく、グラナダ版では原作にみられた様々な「偏見」が時代の要請に応えるかたちで巧みに修正されている。残念ながら『緋色の研究』は撮影されなかったが、1987年に放映された『四つの署名』では¹⁾、原作に見られた錯誤や謬見が細部にいたるまで入念に検討され、随所でさりげなく訂正されている。たとえば、冒頭の有名な場面に見られるコカインを皮下注射するホームズの姿は慎重に削除され、ジョナサン・スモールをアングラ城塞で殺人に巻き込み、ラージャの財宝を奪った3人のパンジャブ人の名前も、イスラーム・シク両宗教の奇妙な混成名から、原理的に正しいシク教徒の名前に書き換えられている²⁾。

他方、ホームズによって暴かれる殺人犯トンガについては、その奇形的な矮人性が殺人トリックの核をなしているため、現実には即して表象のゆがみを正し、「政治的に正しい」アンダマン人像を産み出すことができない。そこで、グラナダ版では彼の身体の獵奇性を思い切って逆方向に振り切り、その姿がインド共和国アンダマン・ニコバル連邦直轄地域に住む現実の住民を指すものではなく、純粹に19世紀のイメージ世界に由来することを示すことで、このジレンマをくぐり抜けようとしてい

る。具体的にいえば、トンガは子供のような短躯であるだけではなく、蓬髪と牙のように突き出た歯列によって、まるで獣人のように造形されたのである（図版1）。おかげで、トンガの姿は19世紀をはるかに飛び越え、マルコ・ポーロやイブン・バトゥータの伝える「犬頭の食人種アンダマン人」という神話的世界へと先祖返りすることになってしまった（図版2）³⁾。そして、このような正反対の方向への二重の修正は、そのままですむわけがなく、グラナダ版の『四つの署名』に奇妙なよじれを産み出すことになる。



図版1 キラン・シャー演じるトンガ

グラナダ・テレビ『シャーロック・ホームズの冒険』
第21話、1987年。



図版2 マルコ・ポーロ『東方見聞録』写本に見られる犬頭のアンダマン島民

『全訳 マルコ・ポーロ東方見聞録—「驚異の書」fr.2810
写本』、月村辰雄他訳、岩波書店、2002年、159頁。

密室の殺人現場に残された極端に小さな足跡と、そこに付着したクレオソートの臭いを手がかりにロンドンの迷宮を辿っていく『四つの署名』の調査手法は、やがてホームズの名前を痕跡・兆候を読み解く記号論学者として永遠にとどめることになるだろう。しかし、この作品段階でのホームズの推理はあくまでも足跡というインデックス記号の断続的な連鎖をなぞることで、記号と犯人の身体という指示対象との連続性を回復したにすぎない。つまり、その記号自体が何を意味するのかという点については、まるで物語の最後で空けられた虚ろな宝箱のように、彼自身の推理では空虚なまま放置されているのである。むしろ記号の意味は探偵によって「推測」されるのではなく、別のテキスト群によって「保証」されることになる。ホームズ自身がインド製の煙草の灰を丹念に収集したように（「各種煙草の灰の識別について」）、当時の大英帝国の各地において蓄積・整備されていたアーカイブ、テキストの具体的文脈に則していえば、インド亜大陸に分布する多様な民族集団を地域ごとにカタログ化した「地誌」こそが、記号の意味を明らかにする装置として直裁的に用いられているのである。

原作ではこの民族誌がホームズ自身によって読み上げられるのだが、そのことはグラナダ版の制作者たちに厄介な問題を突きつけることになる。というのも、原作では民族誌の記述こそが奇形的な足跡を植民地の現実につなぎ止める装置として用いられていたのだが、テレビではアンダマン島

民がグロテスクな獣人として描写されたため、問題の地誌は幻想として演出したアンダマン人を改めて民族学的真理として時代錯誤的に固定しかねなかったからである。そこで制作者たちは苦肉の策として、実際にアンダマン島で撮影された歴史的な民族誌写真に、あたかも類人猿のような特殊メイクを施した役者の顔を合成するという荒技を用い、ホームズによる地誌の朗読の場面に挿入することで、その同定があくまでも荒唐無稽な虚構にすぎないことを強調するという戦術を採用したのである（図版3）。



図版3 ホームズ所蔵地誌の挿絵

グラナダ・テレビ「四人の署名」より

なるほどここで起きている事柄はテレビ演出上の些末な問題といえるかもしれない。しかし、それが中世以来連綿と他者によって築かれてき

たアンダマン表象の歴史に新たな一頁を付け加えたことだけは疑いようのない事実である。グラナダ版が制作された1980年代後半には、世界各地で先住民の権利が高らかに謳われ、人類学者たちはこれまで植民地支配の統治技術として発展してきた学問の過去を批判的に振り返り、なかには自らの研究をもっぱら先住民運動の法的、政治的、経済的な根拠の回復・創出に捧げる者も多数現れるようになっていた。グラナダ版のホームズの冒険もそうした動向とけっして無縁なわけではないが、この民族誌写真の事例から分かるように、民族学的知が表象の真正性を担保する権威として用いられる場合、それは当の表象される者の側にとって両義的にも働きうるのである。

その場合、知の二次使用が娯楽の領域でおこなわれるからといって免罪されるわけではない。むしろそこにおいてこそ本来の権力性が浮き彫りにされるといえるだろう。事実、このグラナダ版で新たにホームズの地誌に付け加えられた挿絵は、アンダマン島民について新たに何かを明らかにするというよりも、元々の民族誌学資料で隠蔽された事実を二重に不可視化することで、それを逆に陰画のように浮き上がらせる面をもっている。そこで、本論ではテレビによって創作された合成写真を出発点としてアンダマン表象の近代史をたどり、民族誌写真という仮面の下に隠された地層を掘り起こすことにしたい。

そのためにまずは、ホームズが活用した地誌がいったいいかなるものであったのか、イギリスによって当時推進されていた民族誌学的プロジェクトと、アーサー・コナン・ドイルのテキストをつきあわせることによって、ひとつの仮説を導き出すことにしよう。ただし、そうした試みはいわゆるシャーロキアンの文献渉獵の次元でおこなうものではない。また、これまで多くの歴史学者・人類学者がおこなってきたように、『四つの署名』という文学テキストをアンダマン諸島における歴史学、民族誌学の些末な一エピソードとして、論文の導入部に活用しようというわけでもない。むしろ、ドイルのテキストに描かれた帝国の境界を徘徊する異形なる者たちをめぐる視線が、実際の帝国の辺境において他者を統治する技術や彼らをそれぞれの範疇として分類する視線と同形であることを明らかにしたいのである。

問題の所在

まずは、ホームズが事件解決のために書棚から取り出した分厚い書物、「刊行中の地誌の第1巻 (The first volume of a gazetteer)」について、その内容を紹介することにしよう。

アンダマン諸島：ベンガル湾内、スマトラの北方340マイルに位置する…。気候湿潤、サンゴ礁、サメ、ポート・ブレア、流刑囚収容所、ラットランド島、ハコヤナギ…。アンダマン諸島の先住民は、おそらく地球上でもっとも身長の高い人種であろう（ただし、人類学者の中にはアフリカのブッシュマン、アメリカのディガー・インディアン、あるいはティエラ・デル・フエゴ島民を世界最小とするものもある）。平均身長は4フィートをやや下回り、成人の中にはこれよりもはるかに背の低いものもまま見受けられる。獐猛で気難しく、扱いにくい人種であるが、一度信頼を得れば、きわめて献身的な友情を期待することができる…。彼らは生まれつき醜悪で、頭部は不釣り合いに大きく、目は小さくて凶暴、目鼻立ちはゆがんでいる。一方、手足は驚くほど小さい。反抗的かつ獐猛なため、イギリス政府のあらゆる努力にもかかわらず、彼らを手なずける計画はことごとく失敗に終わっている。難破船の乗組員にとって、彼らはつねに恐怖の的で、生存者は先端に石のついた棍棒で脳天をたたき割られるか、毒矢で射殺された。こうした虐殺は例外なく食人の宴 (a cannibal feast) で終わることになる⁴⁾。

このテキストの出典に関しては、ご多分に洩れずシャーロキアンたちが綿密な文献調査をおこなっており、それが実在しないことが確認されている（シャーロキアンのいえば、「実在はするが、事実と反する信用のならないテキスト」をホームズが用いたということになる）。ベアリング・グールドの註では、すでに20世紀初頭の段階で記述の誤りが指摘されており、アンダマン島民を食人種、極端な短軀、醜貌とする3点において現実と大きく食い違っていることが明らかにされている⁵⁾。

これらの調査結果をふまえ、オックスフォード版のシャーロック・ホームズ全集で『四つの署名』に序論と註を付したクリストファー・ローデンは、ドイルが大英百科辞典第9版（1890年）を参照したのだらうと推測する⁶⁾。同百科辞典において「アンダマン諸島」の項目を執筆したのは、マルコ・ポーロ研究で名高いヘンリー・ユールであり、彼が「住民」をめぐる小項目で最初に引用した9世紀半ばのアラビア語文献が、おそらくドイルの出典になったのだらうとみられている⁷⁾。ただし、ユール自身の見解ではアンダマン島民が食人種であることは否定され⁸⁾、その身長もドイルのように4フィートではなく、5フィートを下回ると言明されている。

さらに正木恒夫はローデンが註で挙げた大英百科辞典第9版と第11版（1910年）の違いに着目し、独自の解釈を打ち出した⁹⁾。両版の比較から明らかなように、ドイルが執筆した19世紀末にはアンダマン表象が中世以来の神話の世界から、より客観的な科学的記述へと移行しようとしていた。すでに第9版の時点で食人種という幻想は揺らぎつつあり、身体上の審美的な醜さだけがアフリカの黒人との人種的な類縁性からかろうじて偏見として残されていたにすぎない。にもかかわらず、ドイルはあえて時代の潮流に逆行するように、アンダマン島民の野蛮性を強調する操作をおこなっており、おそらくそれによって彼は植民地に偏在する悪や狂気、蛮行、汚濁をあえて増幅し、帝国を闇の浸透から守り、光のもとで浄化するというホームズの使命をより鮮明にしようとしたのだらうという。なるほど、ホームズが帝国内部において揺るぎがちになってきた自他の境界を再建する守

護神として造形されたとするならば、彼がその区別の根拠として植民地民族学というオリエンタリズムの精華ともいべきテキストを武器とするのは当然といえるだろう。

しかしながら、はたしてドイルは大英百科辞典第9版だけを用い、19世紀末のイギリス市民のあいだに残っていた偏見をそのまま物語の前提に据え、そこから自らの文学的想像力を自由に羽ばたかせたのだろうか。実は、そう断言することをはばからせる疑問が、ホームズの用いた「失われた民族誌」の出典をめぐるいくつか存在するのである。

まず何よりもこの点で看過してはならないのは、ドイルが19世紀末イギリスにおける医療教育・研究の中心地であったエディンバラ大学で医者としての教育を受けていることである。インドにおける監獄制度は1860年代を境として徐々に改革されてゆき、その監督官にはインド高等医官が採用されるようになっていた¹⁰⁾。事実、アンダマン諸島における第2次流刑植民地は、後述するように、ベンガル管区の監獄査察官を務めた軍医フレデリック・ジョン・ムートがインド政庁の命を受けて1857年に同諸島を探検したことに始まり、翌年に最初の囚人を率いて流刑地建設を指揮したのも同じく軍医のジェイムズ・パティソン・ウォーカーであった。それ以降、アンダマン植民地は直接インド高等医官によって統治されなくても、必ず専属の軍医が複数配置され、流刑囚だけではなく、先住民の医療・公衆衛生にも従事してきた。このため、アンダマン島民に関する情報はドイルの先輩に当たる一群の医師たちによって収集され、本国の研究機関に報告されていたのである。だとするならば、ドイルが医学や解剖学といった別の回路を通じて、当時の最新の民族誌学的成果を吸収していた可能性も十分に考えられ、彼の知識が当時の一般市民と同じレベルにあったと断ずることはできないことになる。

第二に、正木等の仮説ではドイルがなぜ第2作目のホームズ物語を執筆するにあたってアンダマン島民を重要な登場人物に選択したのかまったく説明がつかないという問題がある。もちろん、ドイルはホームズ物語を記す以前から植民地を舞台、あるいは背景に用いた短編を創作しており、その選択は偶然なのかもしれない。しかし、時代錯誤的操作をあえておこなってまで、アンダマン島民を野蛮な怪物に変容させたとするならば、その背後にはドイル自身の明確な意図が働いていたとみるのが自然であろう。したがって、「失われた民族誌」の探索はたんなる文献渉獵の域にとどまらず、アンダマン島民を選択する創作上の戦略自体に迫るものでなくてはならないはずである。

そして最後に、『四つの署名』が単純な文明と野蛮の二項対立図式で構成されているわけではないという根本的な問題が残っている。『四つの署名』であれ、「曲がった男」や「白面の兵士」であれ、首都に脅威をもたらすのは、野蛮人自身ではなく、外の力に汚染されて奇形化した身体をもつヨーロッパ人に他ならないからである。軍務の途上でワニに襲われて右脚を失った『四つの署名』のジョナサン・スモールは、たとえプランテーションの管理人や流刑囚収容所の医療助手として権力の一端を担うことができたにせよ、植民地支配の主体に位置づけることは難しい。しかも彼はシク教徒とアンダマン島民という異なったタイプの他者を繋ぐ蝶番の役割を果たしている。英語を解さない沈黙の存在として、声を奪われているものの、謎としての殺人の核心に位置するトンガと、言語や文字を仲介してコミュニケーションは取れるものの、物語の核心部では不可視の存在として隠されてしまうシク教徒との差異はきわめて鮮明であって、それを単純に帝国に内包された他者性の尺度、あるいは文明化の度合いとして看過することはできない。むしろ3者の関係は、現実の歴史を振り返った場合、植民地支配における権力の複雑な動態を正確に映し出していると考えた方がよいのではないだろうか。すなわち、ドイルによって創作された民族誌はたとえ虚構であっても、その機能

の点においては実際に植民地で生産された民族誌と同じ役割を果たしていたのかもしれないのである。

そこで、本稿では第3の問題にアプローチする準備作業として、主として第1、第2の問題に取り組み、そこでえられた素材を用いて文学と民族誌との言説上の同形性を検討する糸口を探ることにする。

博覧会と展示される身体

一般的にあって、ドイルが『四つの署名』を執筆していた1889年前後に定期的に刊行されていた大部の地誌といえば、「帝国地誌」(*The Imperial Gazetteer of India*)のことを指すと見るのがインド史における常識といえるだろう。これは19世紀初頭から英領インドの各管区において散発的におこなわれた地誌情報を体系化するという国家的プロジェクトに端を発しており、作業自体は20世紀に入ってから継続され、帝国全体、州、県の三層構造に分かれて、膨大な著作が産み出された。おそらくドイルが参考にしたのは、W・W・ハンターがインド総督の命を受けて「統計担当官」として編纂した初版全9巻(1877-1881年)か、その後に増補改訂した第二版全14巻(1885-87年)のいずれかであり、後者の可能性がきわめて高い¹¹⁾。

帝国地誌初版の第1巻「アンダマン諸島」¹²⁾の項を繙いてみると、島民を食人種とする記述は歴史記録の引用を除いて見られず、なるほどシャーロキアンたちの指摘するように、ドイルの民族誌の原典とはとうてい認めがたい。むしろそこでは近代的な医療や教育システムを導入し、暴力に対しては断固たる懲罰を下すことによって、住民の獐猛さが徐々に善導されるようになったと強調されている。また、身長も5フィート以下とされているにすぎず、醜貌をめぐる記述は一切ない。執筆者が誰かについて断言はできないが、記述からすると初版と第2版の執筆者は同一人物のようであり、長期にわたってアンダマン島の現場で島民と関わってきた人物であることは疑いようがない。ただし、アンダマン諸島の歴史については大英百科辞典のユール論文が参考にされており、おそらくはそのことから同論文がドイルの「失われた民族誌」の源泉とみなされたのだと思われる。

ユール論文を読み直してみると、そこではプトレマイオスを起点として9世紀のアラビア語資料、14世紀のマルコ・ポーロ、15世紀のニコロ・コンティ、16世紀のチェザーレ・フェデリチ、18世紀のアレクサンダー・ハミルトン等の記録が縦横に駆使されており、まさに東西文化史研究の泰斗としての面目躍如といえる論述となっている。しかしながら、現地調査をおこなったわけではないユールが当時の住民の状況を執筆するには、いうまでもなく流刑植民地建設に携わった官僚や軍人、医師たちの公式記録や論文を活用せざるをえず、大英百科辞典と帝国地誌は相互に参照し合う鏡像的關係にあったことが分かる。しかも、イギリスによる流刑植民地建設は何も19世紀後半になって初めておこなわれたわけではなく、散発的とはいえ、すでに18世紀末からアンダマン島民の民族誌学的記録も蓄積されていたのである。

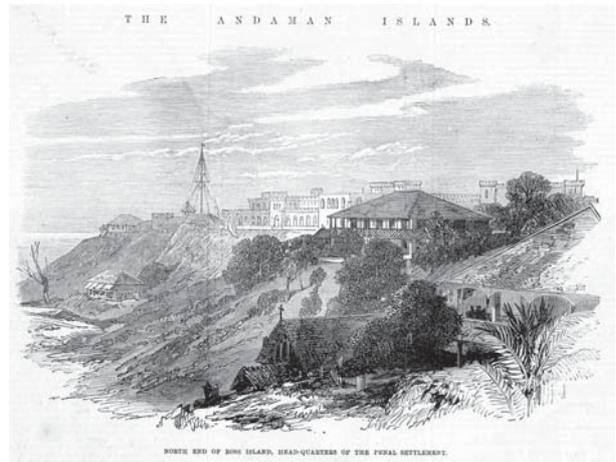
イギリスが最初にアンダマン諸島に入植したのは18世紀末のことであった。1788年末に、当時のベンガル総督であるC・コーンウォリス卿はベンガル湾から東南アジアに抜ける海路の安全を図るため、コストのかからない労働力として流刑囚を活用した植民地と避難港建設を検討し、ベンガル工兵隊のR・H・コールブルック中尉とインド海軍のアーチボルド・ブレア海尉を派遣した。その

調査報告に基づいて、1789年9月に最初の入植地が南アンダマン島の南東湾にあるチャタム島に建設され、ポート・コーンウォーリス（現在のポート・ブレア）と命名されることになったのである。この入植地は戦略上の理由から1792年に北方へと移動されたが、衛生状態が極端に劣悪である上に、ヨーロッパでフランス革命が勃発し、南アジアでもフランスとの対立が激化したことから、最終的には1796年に放棄されることとなった。その際に島にいた人員820名のうち、囚人270人はペナンに移送され、残りはベンガルに戻ったという¹³⁾。

それから半世紀以上経った1857年、インド大反乱に加担した多数のインド人が逮捕され、本土の監獄がさらなる襲撃の対象になる危険性が高まったため、ムガル皇帝バハードゥル・シャー2世をはじめとして、反乱者を安全に収容できる刑務所を早急に域外に見出す必要が生じてきた。また、この頃ベンガル湾では海難者や博物学者がアンダマン島民に虐殺される事件が相次いでおり、南アジアと東南アジアを結ぶ幹線航路の安全を確保するためにも、アンダマン植民地の再建が検討されることになった¹⁴⁾。こうして、57年11月にベンガル管区監獄査察官のムート軍医を筆頭としたアンダマン諸島調査委員会が結成され、同年12月から58年1月にかけて現地調査がおこなわれることになったのである¹⁵⁾。彼らの調査結果を受け、1858年3月からポート・ブレアで流刑植民地の再建作業が開始され、1942-45年の日本軍による短い占領統治を除けば、インドの独立まで流刑植民地は恒常的に発展し続けることになる。とりわけ、一望監視装置の典型ともいべきアンダマン刑務所（The Cellular Jail）が1896年に完成すると、そこには数多くの独立運動家たちが収監され、その建物はインド独立運動の象徴へと昇華することになるだろう¹⁶⁾。

アンダマン島民と入植地との関係についていえば、1863年に行政長官のロバート・C・タイトラーがロス島の行政本部（図版4）の近くに、現地人を「保護」、同化する施設として「アンダマン・ホーム」を建設し、牧師のヘンリー・コービンを初代のアンダマン島民保護官（Officer in Charge of the Andamanese）に任命してから、民族誌学的知識は急速に増加し、彼らの文化やその多様性についても認識が増していった¹⁷⁾。さらに、大英百科辞典第9版や帝国地誌初版におけるアンダマン諸島の項が記された1870年代後半から80年代前半には、島民に関連する施設としてホームの支部や病院、学校、孤児院などがポート・ブレア以外の地域にも建設されるようになっており、少なくとも現地経験のある者が彼らを「食人種」とすることは不可能な状況になっていたのである。

アンダマン島民を食人種とする通説（あるいは中世以来の神話）は、すでにムートによる公式調査報告書の段階でもはっきりと退けられている¹⁸⁾。さらに第1次入植地建設の時点ですら、ムートに比べれば歯切れが悪いものの、コールブルックが少なくとも調査の時点では食人種説の証拠が見出せないと報告している。



図版4 アンダマン流刑囚収容所の本部が置かれたロス島北端の風景

The Illustrated London News, 24 Feb, 1872, p. 188.

彼らが食人種であることが完全に裏付けられたことは一度もないが、その残忍で血を望む気質、飽くなき食欲、奇襲を仕掛ける狡猾な方法などからするとそう疑われても仕方がない。というのも、異邦人を襲う場合、彼らはしばしば飢餓に突き動かされており、自分の手に落ちた不幸な犠牲者は必ず殺害されているからである。しかしながら、敵の肉を食べることを示す証拠はいまのところ知られていない。ただし、殺害した者の遺体をずたずたに切り裂くことは知られている¹⁹⁾。

このことからすると、18世紀末においてはまだ曖昧であった食人種説が、19世紀中葉に学術的な調査がおこなわれ、植民地が発展していくにつれ徐々に否定されていったということになる。また、1848年に出版された一般旅行者向けガイドブック『東洋語解説および東インド地誌宝典』でも、それは婉曲に否定されており、第2次植民地建設直前でも、18世紀末の資料に基づいてすでにそう推測されていたことがうかがえる²⁰⁾。だとすれば、ドイルが『四つの署名』を執筆する段階でアンダマン島民を食人種とみなしているのは、インドに赴く当時の旅行者の知識水準からしても明らかに時代錯誤であり、その操作には何らかの作為が働いていたといわざるをえないだろう。

しかし、知識人や官僚ではなく、インド経験ももたない一般のイギリス市民はアンダマン島民に対して当時どのようなイメージを有していたのだろうか。おそらく、彼らにとってみればアンダマン島民は数多くの野蛮人の一種にすぎず、当然のことながら彼らは「食人習慣」という幻想によって一括りにされていたにちがいない。実は、そうした大衆の偏見を助長するような出来事が『四つの署名』執筆の3年前にロンドンで起きていた。1886年5月にサウス・ケンジントンで開催された植民地・インド博覧会において、アンダマン島民の等身大模型が半年にわたって展示されたのである²¹⁾。

ヴィクトリア女王の即位50周年を記念して開催されたこの博覧会は、商業活性化のために帝国各地の産物や最新の科学技術を内外に紹介するショーケースとして企画されたものだが、その名称が示すように、植民地のあいだに存在する融和の絆を強め、連合体としての大英帝国自体を可視化する装置として、企画者だけではなく、当時のメディア²²⁾によっても明確に意識されていた。このため、博覧会では帝国臣民の多様性と統合を一目で表すような仕組みが数多く産み出されていた。そのひとつとしてインド側の博覧会委員であるジョージ・ワットは、アフガン、ネパール、シッキム、アッサム、ナーガ、ビルマなど帝国辺境の12の地域につき、それぞれ典型的な民族衣装と装身具を身につけた等身大の人体模型を「経済通商部門展示会場」に出品している²³⁾。そして、その一角にアンダマン島民の模型が展示されたのである。クレア・ウィントルによれば、これらの模型は1883年のカルカッタ国際博覧会に出品された粘土像の複製であり、オリジナルはクリシュノナガルの彫刻家ジョドゥナト・パルによって制作されたものだという。また、製造には実際のモデルが用いられ、そのためにわざわざアンダマン島から一組の夫婦がカルカッタに呼び寄せられたという²⁴⁾。

ワットによる公式カタログの解説には、「食人種」といった語はまったく見られず、最新の民族学的知見が淡々と述べられているにすぎない。しかし、一般大衆の目に黒い肌を露呈したアンダマン人の夫婦は別様に映っていたようである。当時のアンダマン島民の風習として、女性が亡くなったばかりの親族や友人の遺骨を装身具として身に纏う習慣があり、頭蓋骨に紐を通して背負うこともあった。博覧会に出品された模型の場合も、妻の方が「真っ黒な乳房の上に近親の白い頭蓋骨をぶら下げていた」という²⁵⁾。ところが、この展示の模様を伝える絵入り新聞では、まるで大衆の期待に応えるかのように、頭蓋骨をもつ人物が女性から男性に置き換えられて描かれており、さらに男

性の姿勢もたんに槍をもつのではなく、上段に構えるように改変され、その野蛮さや好戦性が強調されているのである（図版5）。したがって、たとえ「食人種」という語彙が紙面に記されていないと、読者は頭蓋骨と槍を視覚的に結びつけて容易にそう解釈できたにちがいない。

等身大模型の他にも、86年の博覧会には総勢34名もの生身のインド人が「出展」されており、彼らは職人として会場の中庭で絨毯や粘土像などの工芸品を制作していた²⁶⁾。これらのインド人が当時の一般大衆にどう見られたかという点については、展示を企画運営したインド人官僚のT・N・ムカルジーが、興味深い記録を残している。収税・農務局の職員として国際博覧会への出品物を選定し、美術史的にも高い水準のカタログを作成したことで知られるムカルジーだが、博覧会の会場ではインド人職人や南アフリカの「ズールー人」などと同様に、一般市民の好奇の視線にさらされ続けた。ある日、会場のレストランで新聞を読んでいた際、彼は「明らかに田舎から来たとおぼしい、きちんとした身なりの一家」に盗み見られていることに気づき、彼らについて次のようなコメントを残している。

内面に潜む食人種の本性がわたしの外見に現れていなかったからか、それとも彼らの方が、この時点までにわたしが人肉嗜好を克服したと考えたか、あるいは、わたしが彼らをだまし討ちにしようと狙っていたにせよ、この場所は十分に安全だと確信したのか、ともかく理由は分からないのだが、一家は徐々に大胆になり、ひそひそ声で話し始め、しまいにはわたしの気を引こうとまでしたのである²⁷⁾。

いうまでもなくこれは、帝国内に存在する多様な人種的・階級的差異に無頓着なイギリス人庶民を皮肉ったインド人知識人の当てこすりにほかならない。それでもこの記述からすると、洋服を着こなしたインド人紳士や民族衣装に身につけたインド人職人ですら一様に「野蛮人」として奇異な目で見られていたことが分かり、まして裸の蛮族の模型となれば、彼らが「食人種」とみなされたことはいままでもないだろう。

ドイルが植民地・インド博覧会に足を運んだとは思えないし、新聞の挿絵を通してアンダマン島民の姿を目にしたかどうかは定かではないが、博覧会でアンダマン島民の模型を見つめる一般大衆の視線を土台として、彼が物語を構想したという仮説もあながち成立しなくもないように見える。ただし、展示の舞台裏をのぞいてみると、ことはそう単純ではない。この場合、大衆の想像力は近代的な科学と啓蒙的教化の枠組みの中で初めて飛翔できるようになったからである。一見するとワットは同時代に流行した「人間動物園」の一種として人体模型の展示を企画したかのように思えるが、民族学的展示は「経済部門」の一部をなしており、ワット自身は陳列ケースに整然と並べられた植物や鉱物の標本がもつ無機質さを和らげるために、装飾として模型を導入したにすぎないようである²⁸⁾。ここではアンダマン島民の身体が見世物として展示の焦点をなしたわけではなく、あくまでも原材料



図版5 植民地・インド博覧会に展示されたアンダマン島民の模型

The Illustrated London News, 24 July, 1886, p. 92.

や工業製品が主役だったのである。事実、ドイルも読んだであろうタイムズの記事では、アンダマン諸島で産出されるカリンの材木が特筆されても、人形については一言もふれられていない²⁹⁾。

そもそも模型自体が近代化プロジェクトの成果として産み出されたものであった。制作者のジョドゥナト・パルは粘土像の制作を生業とするベンガル地方の伝統的職人カーストの出身であったが、1864年にカルカッタ官立美術学校の校長に赴任したヘンリー・H・ロックに見出されて、西欧美術の基本を身につけ、自ら学校で教鞭を執るまでになった人物だったのである³⁰⁾。また、彼の作品は1880年のメルボルン国際博覧会、1888年のグラスゴー国際博覧会などにも出品されており、対象を正確に観察し再現する彼の能力は作品をたんなる玩具のレベルから、民族学的資料の位置にまで高めたとみなされている³¹⁾。

民族学展示に関して、ワットは「インドの主要な住民集団を示そうとしただけであって、民族学的分類体系を打ち立てようとしたものではない」³²⁾と言明しているが、宗教やカースト、トライブごとにインド人を体系的に分類する作業は1880年代から90年代にかけてインド全土で繰り広げられており、そうした動向とまったく無縁ではありえなかつただろう。では、いったいいつからアンダマン島民の身体には科学的観察の視線が向けられるようになったのだろうか。実は、彼らの身体を分類秩序の中に位置づける作業は1857年の調査の段階から始まり、首都でも比較解剖学の分野において継続されていたのである。

身体誌としての医学と頭蓋骨コレクター

1857年12月31日、ムートはすでに第1次入植地跡が流刑植民地建設に最適と結論し、帰国のため大アンダマン島西部にあるインタビュー島の沖合を北上していた。その南端にあるサウス・リーフ島を通過していた際、住民が数百人単位で集まっているのが発見されたことから、ムートはこれが島民と接触する最後の機会と判断し、上陸を試みることになった。しかしながら、この2回目の島民との接触は最初の試みと同様に武力衝突に発展し、あとには3人のアンダマン島民の遺体が残されることになったのである³³⁾。

ムートは海中に沈んだ1人を除いて、2人の遺体を船に回収し、それを検視することになる。いささか長くなるが、その経緯について以下に引用することにしよう。

その日のうちにわたしが後甲板に立っていると、1人の前任下士官が船乗り特有の風を切るような歩き方で近づいてきて、こういった。

「すいませんが、プレイフェア軍医がそいつらの頭部をいただきたいとのことです」。

「彼らの頭部だと。いったい彼はそれで何をしようというのかね。我々は誘拐者としてここにいるわけではないんだよ。彼らは友人たちのもとに戻すべきだ」。

2人に固有の身体的特徴が何かないか観察するために、我々は彼らの遺体を隅から隅まで入念に検査した。2人の男性は我々がすでに会った彼らの同族とまったく同様に身長が低い、体の形状はきわめてたくましく、強靱に見え、腕や足、胴体の筋肉は飛び抜けて著しい発達を示していた。一方、彼らの容貌はとても好ましいとか、愉快であるとか、魅力的とはいえないものであった。彼らの表情は死に捉えられた際のままだに凍りついており、そこにはまさに嫌悪と恐

怖を催させるようなものがあった。彼らの顔つきはきわめて荒々しい情念に突き動かされたかのように歪められており、人間の姿としてはあまりにもおぞましく、わたしには彼らが獐猛で冷酷このうえない悪魔の一種にしか見えなかった。もしも彼らの種族全体がこの2人のようなものだとすれば、まさに悪魔の容貌をもつこうした部族のうちに友好的な温かい感情を産み出そうとした我々の試みが、ことごとく失敗したのも仕方がないことだと思われる…。検査を終え、記録にとどめるべきことをすべて記してしまうと、死者に払われるべき敬意や畏敬の感情を損ねないように扱い、我々の船に積み込んでおいたカヌーのうち一艘に、2人の遺体を丁寧に戻すと、それを岸に向けて海に流した³⁴⁾。

ここ見られるのはアンダマン島民の身体に医学の視線が向けられた最初期の事例のひとつだが、奇妙なことにそこでは医師個人の視線が二重化されていたことが分かる。一方には身体の各部を計測し、細部まで観察し記録する科学者、あるいは解剖学者の視線がある。ところが、他方で医師たちは現地人の頭部を「珍品」、あるいは「トロフィー」として収集しようとしており³⁵⁾、その凍りついた表情に芸術ですら表現できない「悪魔的なもの」の表出を見出し、「嫌悪と恐怖」を感じるのである。ドイルの初期小説がいずれもごちない二部構成を呈しており、ホームズが活躍する首都をめぐる語り、犯人たちによる植民地の語りから遮断されていたように、ここではまるで科学的調査の実践が医師の内面にある欲望や恐怖を抑制する緩衝装置として用いられているかのようである。

ムートは遺体を丁寧にカヌーで戻すべきだと主張するが、その一方で船には一人の現地人が監禁されており、彼はジャックという綽名を与えられカルカッタまで拉致されることになる。彼の身体にも医学的検査がなされるが、そこでもやはり科学的実践と見世物の両義的な関係は依然として続いている。すでに洋服を着せられていたジャックの身体からは改めて衣服が剥ぎ取られ、彼の裸体が写真に撮影され、さらに、アンダマン島民がどのような民族集団に連なるのか調べようと、アフリカ人水夫と会話する機会が設けられており、その身体を科学的分類体系に組み込む試みが多面的に繰り広げられている。しかし、その一方でムートはジャックを一目見ようと集まるベンガル人群众を遠ざけるために、一種の人形を作成して彼らの好奇の視線をそらそうともしているのである。ジャックの身代わりとして作成された模型は、あり合わせの材料でブリコラージュされたものであって、まさに美術学校で教育を受ける前にインドの職人たちが制作していた伝統的な玩具を思わせるようなものであった。人形はムートの邸宅の窓辺に置かれ、友人の腹話術師が「野蛮人の雄叫び」を発して動かすことによって、集まった群众は逃げ出したという。

彼らは即席で作った人形を本物のアンダマン人とみなしたので、それは彼の部族についてよく知られた獐猛な性格を一身に表すことになり、人々は我々が一から作り上げた像に自分たちの想像力を託すことになった。それはあまりにも恐ろしいものだったので、かくもおぞましい像とは一定の距離を置いた方がよいだろうとみなされることとなった。しかし、我々のペテンもそう長くは続かなかった…。彼らは自分たちに仕掛けられたインチキに爆笑し…、我々の欺瞞の目的を知ると、以後は我々のことを放っておいてくれたのである…³⁶⁾。

言語によるコミュニケーションが不能なため、アンダマン島民には偽の名前や身体、声を与えられ、その偽装されたイメージに大衆は自らの恐怖と幻想を仮託する。まさに植民地・インド博覧会の会

場でロンドン市民が体験したのと同じ野蛮の演出が、ここではカルカッタの路上でベンガル人群众を相手に繰り広げられていたわけである。

さらにその両義性は3年後の1861年には今度は大学の解剖台の周辺でも再現されることになる。ムートはイギリスに帰国した際、アンダマン成人男性の不完全な骨格標本一体を大英博物館に寄贈しており、それが当時の比較解剖学の第一人者リチャード・オーエンによって調査されたのである。オーエンはこの標本に関連してほぼ同内容の論文を2本執筆しているが³⁷⁾、その骨学的な計測を扱う無味乾燥な記述は、論文の前半でムートやその他の現地調査者の証言に依拠してアンダマン島民の文化や風習を伝える言語とは著しい対比を示している。伝聞による要約から「食人種」ではないことが言明されているが、彼らは冒頭から「矮小黒人」(dwarf blacks)と定義され、「人類の文明化の尺度でいえば最底辺にある」と位置づけられている。まだアンダマン島民をめぐる民族誌は科学として構築され始めたばかりであり、たとえ現地調査を経験したムートやヒースコート海尉がロンドン民族学協会の会合でオーエンの発表を口頭で補足しているにせよ、その内容はあくまでも暫定的な見解にとどまらざるをえず、そうした知の余白には依然として野蛮人をめぐる幻想が色濃く残っていたわけである。

しかしながら、オーエンの研究はたったひとつの頭蓋骨に基づくものであるものの、それをサンプルとしてアンダマン島民を既知の民族集団に結びつけようとする調査方法は、ムートがカルカッタでおこなった方法とは大きく異なるものであった。あくまでも頭蓋骨の容量や脊椎との接合状況などを客観的に計測することによって、彼は言語といった質的手がかりではなく、数量データに基づいてアンダマン人とアフリカ、オーストラリア、東南アジアなどに分布する「ネグロイド種」との関係性を明らかにしようとしたのである。当時のインドにおいて流布していた起源説では、ポルトガル人が奴隷としてアフリカから連れてきた黒人が、難船によってアンダマン諸島に定住するようになったと信じられていた³⁸⁾。これに対して、オーエンは「その子孫の背丈が…たった2、3世紀のうちに縮んでしまい、他の面では発達した体をもち、栄養状態もよく強壯なアンダマン諸島の原住民があの特徴的な矮人性をもつにいたるとは信じられない」として通説を否定する。同時に、今回の少ないサンプル調査では「アンダマン民族を既存の大陸から派生させる何らかの解剖学的な根拠を見いだせなかった」と慎重に保留し、生物地理学の発展から明らかになってきた大陸の地質学的変動の可能性についてふれ、「彼らの起源が今現在生活している場所にあるといった意見に与するつもりもまたない」と結論づけている³⁹⁾。つまり、彼は人類の並行的進化説と人種移住説のいずれの仮説もこの調査では立証されないという立場を取ったわけである。

一方、アンダマン島民の未開性を強調しているにもかかわらず、彼らを進化のミッシングリンクに位置づける立場は明確に拒絶している。

人類の重要な身体特徴のうちどの点をめぐっても、現在のミンコピー、すなわちアンダマン人は知的にもっと恵まれた異教徒と共通している。頭蓋容量から得られた脳の大きさは文明化への適性を保証するものである。アンダマン人がオランウータンやチンパンジーに似ているのはその短軀においてのみであり、それですら人間特有の体軀と四肢のバランスを示している⁴⁰⁾。

この結論は論文前半部の偏見に満ちた記述と顕著な対比を見せているが、おそらくそこにはインド帝国辺境における民族学的見解の公正性よりもはるかに大きな掛け金がかかっていたものと思われる

る。というのも、この論文が発表された1862年という時期は、進化論をめぐる科学的論争のうちもっとも激烈であったトーマス・ヘンリー・ハクスリーとの議論が白熱していた時期だったからである。オーエンがアンダマン島民に着目することになったのは、何よりもその身長の高さ、つまりは一見すると類人猿の身体との「相同性」を思わせる特徴にあったのだろう。身長的にゴリラやチンパンジーに近い身体をもつアンダマン島民が、脳の容量などの解剖学的特徴からはっきり類人猿と異なることが証明できれば、その類似はたんなる「相似」にすぎないことになり、ハクスリーのこのような「低級動物と人間との動物学的関連」(1861年)を論駁できることになるわけである。ここではこの論争に詳しく立ち入ることはしないが⁴¹⁾、少なくとも、これまでのアンダマン島民の身体をめぐる神話が解剖学的調査によって否定され、彼らの身体が猿や犬といった動物ではなく、ヨーロッパ人の身体に科学的に結びつけられるようになったという点では、オーエンの功績は高く評価されるべきだろう。

アンダマン島民の骨格や歯列をめぐる解剖学的調査は、ダーウィンの進化論が広く認められるようになった1880年代末においても連綿と継続されていたようである。ドイルが『四つの署名』を執筆する7ヶ月ほど前のタイムズの記事では、動物学者のウィリアム・ヘンリー・フラワーがアンダマン島民を取り上げ、マレー半島や中央アフリカの低身長民族集団と比較する講演をおこなったことが報じられている⁴²⁾。フラワーはオーエン・ハクスリー論争で後者を支持した動物学者だが、1883年末にオーエンが引退した後、大英博物館の自然史部門の部長職を引き継ぎ、形質人類学の部門でもアンダマン諸島やフィジーなど島嶼部の住民の人骨の精力的な収集で知られる人物である。彼は1879年に19体のアンダマン島民の骨格標本を計測し、その結果について人類学協会に報告しているが、それ以降も人骨の収集は続けられ、85年には2体、さらに89年までには8体の人骨が新たにコレクションに追加されている。要するに、「遺体の国際市場」⁴³⁾は19世紀初頭のように死にたての肉を纏った遺体ではないものの、輸出入が容易な頭蓋骨や骨格を通して依然として活況を呈し続けていたわけである。

フラワーは自分の計測データからより正確なアンダマン島民の平均身長を導き出そうとしており⁴⁴⁾、最終的に1889年の論文では、アンダマン男性の平均身長が4フィート8.5インチ、女性が4フィート6.5インチと算出されている。この時点ですでにドイルの『四つの署名』の記述は新聞に報じられるような医学界の最新成果にあえて逆行するように進められていたことになる。興味深いことに、フラワーはエドワード・ホーレス・マンが現地で48人の男性と41人の女性を計測したデータに言及しつつも、生身の人間より人骨に基づく計測の方が正確であると主張している。これは1881年の人類学協会誌の短い記事とはいささか立場が異なるといえるだろう⁴⁵⁾。というのも、そこでは自分の計測した人骨が不完全であるために、結論は概算たらざるをえないと告白しており、それを補足する資料としてエドワード・S・ブレンダーという医師による男女それぞれ15人の現地での計測結果が紹介されているからである。

ところで、このブレンダー博士とはいったいどのような人物なのだろう。彼はヴァイパー島のアンダマン病院で補助軍医として勤務し、その後第二軍医に昇進した医師であり、アンダマン島民の文化について自らの見聞した情報を簡潔にまとめた論文を著している⁴⁶⁾。そして、彼はその論文をドイルがエディンバラ大学の医学生として在籍中(1876-81年)の1880年2月2日に、エディンバラ王立協会の会合で報告している。しかも、そればかりではない。ブレンダーは1879年10月15日にはなんとアンダマン女性の遺骨をエディンバラ王立外科医医師会に寄贈しているのである。この

標本の寄贈を明らかにした最近の研究によれば⁴⁷⁾、問題の人骨には「ポート・ブレアから送られたアンダマン女性の骨格標本、エディンバラ王立外科医師会フェロー、ブランダー博士による寄贈」(カタログ番号GC2561:図版6)という説明書きが付されている。これは年齢にして35才ほどの女性の人骨で、身長は137センチと低く、遺体を墓地から発掘する際に指骨の一部が欠落した以外は、ほぼ完全な状態であるという。また、ホームズのモデルと目されたエドワード・ベルは、1876年から同医師会の事務局長を、1887年から89年までは会長を務めており、たとえ彼が弟子のドイルとこの標本について議論しなかったとしても、財務管理の必要から寄贈内容について熟知していたはずだと推測されている。

ドイルが問題の標本を知っていたかどうか知るすべがない以上、それが直接的に『四つの署名』の構想を産み出したと断言することはできない。しかしながら、先に挙げたブランダーの論文を読んでもみると、ホームズが利用した地誌の記述との違いはあまりにも大きすぎる。すでにポート・ブレア周辺の住民はアンダマン・ホームを通じて植民地の経済活動に組み入れられ、工芸品の生産などに従事しており、中には英語とウルドゥー語を駆使できるほど同化に成功した少年もいることが報告されている。「食人種」といった語彙はたとえそれを否定するためであれ、まったく用いられていない。身体をめぐる記述でも、男性の平均身長が4フィート10インチもあることが実際の計測から導かれており、醜貌についても、それは身体のレベルではなく、そこに施される化粧や刺青など文化的装飾のレベルにおいてふれられるにすぎない⁴⁸⁾。

仮に医学生のエドワード・ドイルがブランダーの報告についてまったく知らなかったとしても、その報告は当時の医学的言説の水準を表すものであって、そこには60年代まで存在した「醜悪な食人種」を部分的であれ許容するような両義性はまったく認められないことが分かる。だとすると、ドイルはエディンバラ大学でえられたはずの知識を真っ向から否定し、医師としての学識を疑われかねない危険を冒してまで時代錯誤的な地誌を創作したことになる。少なくとも、そうした選択にはたんなる気まぐれではない、何らかの明確な作為が働いていたはずである。

アメリカを迂回して再発見される野蛮

前節で明らかにしたように、ドイルがホームズの地誌を産み出すためにあえて抗っていたのは、たんに世紀の変わり目における一般市民のアンダマン像の変化ではなく、30年近くに渡って繰り返されてきた植民地建設プロジェクトとその成果であった。しかも、彼が地誌の背後に隠蔽したアンダマン島民をめぐるデータは、現地の医師によって収集され、首都の解剖学者や人類学者によって精査されたものである。まだ医師としての成功も捨てていなかったドイルが、なぜそこまで当時の



図版6 エディンバラ王立外科医師会博物館所蔵のアンダマン女性の頭蓋骨 (GC 25661)

D. L. Gardner, et al., "A little-known aspect of Arthur Conan Doyle", p. 3.

医学的知識の蓄積を否定するような創作をおこなったのだろう。この点を検討するにあたっては、まずは『四つの署名』を執筆するにいたる経緯を振り返ってみる必要があるだろう。

1885年から90年にかけてドイルは様々な雑誌に短編を発表していたが、はかばかしい成功を収めることはできなかった。そんななかドイルはアメリカの『リピンコッツ・マンズリー』誌の編集者ジョセフ・マーシャル・ストッダートから、1889年8月に夕食の招待を受けることになった。同誌を英米同時発行するために新人作家を捜していたストッダートは、アメリカを舞台の一部に組み込んだ『緋色の研究』に着目しており、ドイルに執筆依頼することを検討していたのである⁴⁹⁾。ご存じのようにそこから『四つの署名』が誕生し、シャーロック・ホームズの名前はやがて世界中にとどろくことになる。

この有名なエピソードに関していえば、そこではアメリカというトポスが重要な役割を果たしていた点に留意しなければならないだろう。アメリカの雑誌からの依頼を受けたドイルは、モルモン教について取り上げた『緋色の研究』の第2作を執筆する決定を下しており、おそらくは同じようにアメリカという主題を作品で扱おうとしたにちがいない。ただし、舞台を再びアメリカに据えることは芸がないので、もっと婉曲な方法を採用せざるをえない。そこでドイルは青年時代からの文学的アイドルであったエドガー・アラン・ポーの「モルグ街の殺人事件」を取り上げ、そのトリックを別の文脈に置き換えることで彼にオマージュを捧げることにしたのである。

ここまではよく知られた事実だが、ドイルにとってアメリカという空間を想う場合、彼の文学体験のより古い地層にもう一人の作家がいることは忘れられがちである。すなわち、少年時代の愛読書であったアメリカ西部を舞台にした冒険小説の著者メイン・リード(1818-1883年)の存在である⁵⁰⁾。ドイルの創作活動にとって、リードが特別な地位を占めたことは1897年のエッセイ「処女作」でも明らかで、そこでは6才の時に描いた最初の作品(虎と男の登場する絵物語)や10才に創作した第二作がリードへの郷愁とともに語られている⁵¹⁾。しかし、リードの名前は『アイヴァンホー』(1820年)のウォルター・スコットや、『モヒカン族の最後』(1826年)のジェームズ・フェニモア・クーパーとはちがって、19世紀という時代を乗り越えることはなく、ドイルの愛した『頭皮狩り』(1851年)や『首なしの騎手』(1865年)といった作品群は、今日では忘却の彼方に追いやられている。

リードは1846年に米墨戦争に士官として従軍しており、処女作『ライフル・レンジャー』(1850年)をはじめとして、その作品には西部の過酷な現実をめぐる彼自身の見聞がふんだんに盛り込まれていた。そうした実体験の迫力から彼の作品は英語圏だけではなく、ヨーロッパ全域で愛読され⁵²⁾、19世紀後半の少年たちにアメリカという野生の空間を想像する様々な素材を提供したようだ。

一方、彼は小説だけではなく、少年向けの実話読み物も執筆しており、そうした一冊として『奇怪な民族—特殊な人種をめぐる平易な解説』という著作を1860年に上梓している⁵³⁾。これは全18章からなるノンフィクションで、各章でひとつの未開民族を取り上げてその風習を紹介するという体裁を取っている。一種の「野蛮百科大全」とでも呼べそうな企画である以上、当然のことながらそこには当時もっとも野蛮だと見られていた4大未開民族も、それぞれ別個の章を割いて網羅されている。冒頭の第1章で南アフリカのコイ・サン人が「藪の民」として、ディガーと呼ばれた北米大陸のパイユート人が「根掘り人」として、南米のヤーガン人が「フエゴ島の矮人」として紹介され、そしてその第16章には本稿で論じてきたアンダマン島民が「泥飾り人」(mud-bedaubers)として登場するのである。

以上のような執筆の経緯を考慮に入れると、この『奇怪な民族]こそがホームズの「失われた民

族誌」の正体ではないかという仮説が浮かび上がってくるように思える。実際のところ、アメリカを迂回してドイルが少年期の野蛮への憧憬を再発見し、それを医学生時代に骨格標本として触れたかもしれないアンダマン人の身体に結晶化したと考えれば、これまで『四つの署名』と現実の民族誌との関係において疑問であった点がいくつか氷解するのである。

リードは執筆の時点で第2次アンダマン植民地建設の計画について新聞などを通じて知っていたようだが、まだムートの調査報告書や論文は入手できておらず、新聞報道を除けば、第1次植民地の時期に記された記録だけを資料として利用したようである。紹介されているエピソードを具体的に比較してみると、どうやら前述したコールブルックの論文と、1795年にビルマのアヴァ王国へ向かう途中でアンダマンに立ち寄ったマイケル・シムズ中佐の見聞記⁵⁴⁾が主たる情報源として活用されたようである。

しかし、情報が18世紀末のものであるにもかかわらず、リードはアンダマン島民が食人種であることを断固として否定している。

彼らは語のいかなる意味でも食人種ではない。もしかりに彼らが人肉を食べたのだとするならば、もっともそれすら証拠はないのだが、それは飢餓によってそうせざるをえなかったからである。そうした状況にあれば、同じことをしたものが地上のいかなる民族にも見いだせただろうし、最近でもしばしばニュー・メキシコやカリフォルニアの山中では、イギリス人やドイツ人、フランス人、アメリカ人が同じことをしている⁵⁵⁾。

リードはこの章を北アンダマン島と中アンダマン島のあいだに存在する水路の発見譚から始めているが、エピソードの末尾でヨーロッパ人とインド人の水夫がボートで漂流中に仲間を食べた事実についてふれており、明らかにそれはここで引用した記述の導入部となっている。つまり、リードにとって「食人種」という概念はあくまでもヨーロッパ側の神話にすぎず、極限状態において人肉食は普遍的現象だとみなされていたのである。1880年にニューヨークで出版された再版では『人喰い人種およびその他の奇怪な民族』と改題されているが、少なくともテキスト本体ではこのように野蛮の相対化がはっきりと図られている。こうした相対主義的な態度は、おそらくリードのフィールド体験によるところが大きいと思われるが、この時期に少年冒険譚を記した作家たちにも共通して見られる傾向だという⁵⁶⁾。

これに対して、島民の野蛮さや醜貌についてはきわめて明瞭に当時の偏見をあらわにしている。しかもそれはホームズの地誌とまったく変わらぬことばで表されているのである。

たとえ、食人種ではないにせよ、彼らが最下等の野蛮人であることは紛れもない事実である。彼らは社会生活を構成するどんな慎ましい技術ですらまったくといって知らず、何らかの組織をもつ程度にすら進歩していない。この点では彼らはアフリカのブッシュマンや北米のディガーとどっこいどっこいであり、むしろあの衰れに痩せこけたティエラ・デル・フエゴ人に近い。彼らは部族の絆をもたず、まるで猿や他の群生動物のように、ばらばらのグループや群れで生活している。

一人の人間としてみると、アンダマン人は既知の野蛮人の中でももっとも「醜悪」な民族のひとつに数えられる。彼の身長は低く、かろうじて5フィートに達するにすぎず、妻の方は彼

よりも頭ひとつ小さい。両者は本来の肌の色が見いだせるならば、タールのように真っ黒である⁵⁷⁾。

…さらに前述した醜悪な容貌に加え、頭部はまったく均整を欠いており、赤く充血した小さな目玉は眼窩に深く落ち窪んでいる⁵⁸⁾。

コールブルックの論文では島民の身体的特徴についてこれほど詳細に言及されておらず、赤く小さな眼球と巨大な頭に関する記述はない。これに対し、シムズの著作には眼球の記述だけが見られ⁵⁹⁾、たった5日だけアンダマン島に滞在したシムズの伝聞が島民の醜貌をめぐるリードの典拠となったことがうかがわれる。この小さな目玉と巨大な頭部に関する言及は、実物の頭蓋骨を計測したオーエンによる学術論文以降では、当然のことながら、まったく見られなくなっており、それは大英百科辞典第9版でも帝国地誌初版でも同様である。ところが、ドイルの民族誌はいずれの出典にも見当たらない2つの特徴にそろってふれており、その謎もドイルがリードを介してシムズの空想を継承したと考えるならば納得がゆく。もしそれが正しいとするならば、ドイルは19世紀中葉どころか、1世紀も時間を遡ってアンダマン島民の身体を再創造したことになる。まさにグラナダ・テレビの合成写真のように、ドイルの原作自体でも幻想への意図的回帰がなされていたわけである。

仮にドイルがリードの『奇怪な民族』に基づいてホームズの地誌を創作したとしても、その対応関係にうまく収まらない要素がまだ二つ残されている。ひとつはアンダマン島民の身長だが、これはポーのオランウータンに重ね合わせるために不可欠な操作であり、そのきっかけとしてはエディンバラ大学においてアンダマン女性の骨格標本にふれたことがあったのかもしれない⁶⁰⁾。第二は、アンダマン島民の「献身的な友情」である。こちらに関しては少なくともリードの問題の章に手がかりはまったくない。しかし、別の章を参照することで仮説を立てることは可能であるように思われる。

『四つの署名』に現れるアンダマン島民の描写で読者の首をひねらせるもっとも奇妙な点は、その容貌ではなく、むしろ彼に与えられた「トンガ」という名前ではないだろうか。それがアンダマン諸部族の名前でも、ヒンドゥーやシク教徒の名前でもないことはいままでもない。強いてヒンディー語に由来を求めるとするならば、北インドの田舎で今日も用いられている小型二輪馬車を指す名詞ターンガー (tonga) が候補として挙げられるかもしれない。ところが、リードの『奇怪な民族』を手がかりにしてみると、別の可能性も浮かんでくる。ごく素直に解し、それが「トンガ人」に由来すると見る途である。第7章と第8章で南太平洋のフィジー人とトンガ人がそれぞれ取り上げられており、そこでは両者が奇妙な共生関係で分かち難く結びつけられているとみなされているのである。

リードによって正真正銘の「食人種の王」とされたフィジー人は優れた知性と、良質のカヌーや武器を生産する技術力を有しており、隣のフレンドリー諸島に住むトンガ人は絶えずそこを訪れては、芸術や工芸の知識を向上させているという。両者の関係は一種の同盟のような性格を帯び、フィジー人との密接な交流は結果的にトンガ人に悪しき影響も及ぼすことになる。つまり、本来トンガ人がもっていない戦争好きや食人習慣といった悪習も智慧と同時にフィジー人から受け取ってしまったというのである⁶¹⁾。こうした従順な性質はまさにアンダマン島民トンガの中にもはっきりと浮かび、彼とジョナサン・スモールとのあいだにはイギリスに向かう長い旅において強固な絆が築かれるようになっている。だとするならば、ドイルはアメリカを迂回することによって、自分の幼年時代に愛したリードの著作を再発見し、テキストに散乱する多様な野蛮人像をアンダマン人トンガという一点に集束させたとは考えられないだろうか⁶²⁾。

しかしながら、そうした屈折を通して産み出されたイメージはドイルのテキストの上に奇妙に転倒したかたちで結像している。『四つの署名』で殺人を犯すのはスモールではなく、トンガやシク教徒たちの方であり、智慧をもたらす側でありながらスモールにはフィジー人のような獷猛で狡猾な性格が帰されていないのである。こうして我々はようやく冒頭に挙げた第3の問題点にたどり着いたことになる。スモールとトンガの共生関係が実際にリードのテキストに由来するかはともかく、フィジー人とトンガ人の関係と対比して考え合わせると、そこからはドイルのテキストに描かれていないシク教徒たちとアンダマン島民の関係が浮き彫りとなり、アンダマン植民地で繰り広げられた現実の政治に通底する糸口がえられるからである。

トンガとシク教徒はともにスモールと信頼の絆によって結ばれているが、殺人の動機において著しい対照性を示している。トンガはスモールを守ろうとして暴力を行使するが、その殺人はあくまでも衝動的なものであって、打算のない友情と野生の自然な発露として描かれる。これに対して、物語の後半で不可視の存在に転じる3人のシク教徒たちは、自らの利益のために殺人を犯し、共犯としてスモールをその陰謀に狡猾に巻き込み、彼を墮落させるのである。いずれの殺人にもスモールは直接的には関与しておらず、彼が手を下したのはアンダマン島から逃亡する夜にたまたま出くわしたインド人看守、「いまましいパタン人」だけであった。その犯行にはトンガの野生もシク教徒の打算もまったく働いておらず、純然たる偶然に基づく復讐とってよいだろう。

この最後の点からすると、ここでは『四つの署名』執筆時にもっとも近い時点においてアンダマン諸島で起きた重大な事件のことを想起せざるをえない。1872年に時の総督メイヨー卿がアンダマン流刑植民地を公式訪問し、そこでパシュトゥーン人流刑囚のシェール・アリによって殺害されてしまったのである。すでにこの頃までに大反乱の収監者は大半が死去していたというが、おそらくこの事件は1世紀以上に及ぶインド人の啓蒙教化の試みにあらためて失敗の烙印を押すことになったにちがいない。他方、つねに反乱の陰謀を画策する油断ならないインド人に比較して、獷猛な未開人たちはたとえ食人種としての暴力を完全に捨て去ることがなかったとしても、主人としてのイギリス人からしてみれば、信用に値する従属者に映ったことであろう。入植者の持ち込んだ伝染病に対して免役をもたなかったように、文明を知らぬ彼らの無垢な自然状態は、インド人のように道徳的に退廃することがないよう、慎重に彼らから隔離して保護しなければならない。たとえアンダマン・ホームにおいて同化の実験が繰り広げられたとはいえ、島民を全面的に同化吸収する植民地政策は、インド本土と違ってアンダマン諸島ではけっして採用されなかったのである。

この意味においてドイルのテキストはまさに「反乱鎮圧の散文」⁶³⁾として機能していた可能性がある。リードのテキストで否定された食人習慣をあえてアンダマン人に帰すことで、フィジー人とトンガ人の関係は完全に逆転する。おかげで本国と植民地のはざまを揺れ動く植民地労働者のスモールは、現地人と連帯して母国の権力に抵抗する契機を失い、たんなる犯罪者に落魄するが、人が人を喰らう無慈悲な暴力からは解放され、人種的優位だけを維持できることになる。さらに両者の相互依存関係からインド人は完全にはじき出され、インド大反乱をめぐる彼らの大義も財宝をめぐる陳腐な争いにまで矮小化されてしまう。こうして彼らはイギリス人に教育と訓練を施された「精鋭部隊」であるにもかかわらず、「ありとあらゆる種類の狂信者や恐ろしい悪魔崇拜者」⁶⁴⁾の群れという矛盾した烙印を押され、物語の後半部ではトンガ同様に声を奪われ、不可視の存在として静かに舞台から退場してゆくのである。

*

以上の考察から、次のような創作プロセスが浮かび上がってくるように思える。すなわち、ドイルはアメリカ人編集者の執筆依頼を受けて、再びホームズをアメリカとの関連で活躍させる決定を下し、子供時代からの2人の文学的英雄に賛辞を捧げようとしたのではないだろうか。ミステリーの核となるトリックについては、ポーの「モルグ街の殺人事件」から借り受け、医学教育を通じて獲得しえた知識をもとに犯人を動物から人間に置き換えることができた。しかし、そうした操作は当時の民族学的な知識に逆行するものであり、それを弁明する仕掛けを作中に築く必要に駆られることになる。そこでドイルはもう一人のアイドルであったメイン・リードのテキストを取り上げ、その記述を意図的に改編することによってホームズの地誌を捏造し、最初の操作を正当化する根拠としたのである。このような二重の操作は作品の構成にゆがみをもたらすが、意図せぬ結果としてそれはマレー半島やフィジー島、アンダマン諸島といった帝国の周縁部で働いていた権力の重層的な実態を逆照射することになった。そこで今度は稿を改め、ドイルのテキストを民族誌から読み解くのではなく、彼がリードのテキストを活用して産み出したアンダマン人像から現実の民族誌を読み直し、辺境の植民地で働いていた分断統治のレトリックを明らかにすることにしよう。おそらくはそれによって本論の冒頭に掲げた虚構の民族誌写真の下に隠されたアンダマン人の素顔にたどり着くことも可能になるにちがいない。

註

- 1) グラナダ・テレビジョン 「四人の署名」、『シャーロック・ホームズの冒険 (完全版)』第11巻、DVD、ハピネット・ピクチャーズ、2004年。
- 2) 『四つの署名』の原題は初出時の *The Sign of the Four; or, The Problem of the Sholtos* から、単行本化された際に *The Sign of Four* に改められており、邦題についても『四つの署名』ではなく、『四人の署名』、『四人の記号』が正しいとする議論がある。この議論に対するグラナダ版の解答はきわめてユニークだ。『グル・グラント・サーヒブ』というテキストを至聖の根本聖典とするシク教徒が、自分の署名すらきちんと書けないとするのは偏見であるとし、4人が殺人の共謀の誓いとして宝の地図に記した署名は、原作の四つの赤い十字形記号から、ドラマではグルムキー文字に置き換えられている。ところが、署名として選ばれた文字はグルムキー文字の数字の4であるため、なんとタイトルは『4という記号』を意味することになってしまったのである。
- 3) マルコ・ポーロ『東方見聞録』第2巻、愛宕松男訳註、平凡社東洋文庫、1971年、163-65頁。イブン・バットゥータ『大旅行記』第6巻、家島彦一訳註、平凡社東洋文庫、2001年、390-93頁。犬頭人という神話的イメージの広がりや厚みに関しては、次の著作を参照されたい。デヴィッド・ゴードン・ホワイト『犬人怪物の神話—西欧、インド、中国文化圏におけるドッグマン伝承』、金利光訳、工作舎、2001年。
- 4) 引用に当たってはちくま文庫に収められた『詳注版シャーロック・ホームズ全集』を活用したが、訳文については文脈に応じて適宜変更している（『四つの署名』、伊村元道訳、『ベアリング・ゲールド詳注版シャーロック・ホームズ全集』第5巻所収、小池滋監訳、筑摩書房、1997年）。また原文については、以下を底本とした。Arthur Conan Doyle, *The Sign of the Four*, ed., Christopher Roden, Oxford University Press, 1993.
- 5) 『ベアリング・ゲールド詳注版 シャーロック・ホームズ全集』第5巻、187-188頁。
- 6) Doyle, *The Sign of the Four*, ed., Christopher Roden, pp. 131-132（『シャーロック・ホームズ全集 第2巻 四つのサイン』、高田寛訳、河出書房新社、1998年、201-202頁）。この仮説は最新の詳注版ホームズ全集でも採用されている。Sir Arthur Conan Doyle, *The New Annotated Sherlock Holmes*, vol. III, ed., Leslie S. Klinger, W. W. Norton and Company, 2006, pp. 307-09.

- 7) あくまでも当時のアラブ人船乗りが抱いていた見解として、次の一節が引用されている。「両島の住民は人間をきたまま食べ、色は黒く、毛髪は縮れており、目つきや顔立ちにはまさに人をぞっとさせるところがある…」(前掲のローデンの註を参照)。ここでの翻訳はあえて英語から重訳したが、アラビア語からの翻訳については次を参照されたい。『中国とインドの諸情報、第一の書』、家島彦一訳註、平凡社東洋文庫、2007年、29-31頁。なお、ユールについては我が国の東西交流史研究においても高く評価されており、第2次世界大戦中に主著の一冊が翻訳されている。ヘンリー・ユール『東西交渉史一支那及び支那への道』、鈴木俊訳、帝国書院、1944年。
- 8) 「食人種であるという古くからある非難は根強く続いてきたが、それは彼ら自身によって完全に否定されており、最近の我国の入植地建設に携わったものもそれを一様に退けている。ただし難破船の乗組員の虐殺については疑いようもなく、そうしたおぞましい行為はこれらの島々でも、ニコバル諸島でもいまだに続いている」(Henry Yule, “People”, in “Andaman Islands”, *Encyclopaedia Britannica*, 9th edition, 1890)。
- 9) 正木恒夫「第12章 シャーロック・ホームズの光と闇」、『植民地幻想—イギリス文学と非ヨーロッパ』所収、みすず書房、1995年。さらに次も参照されたい。Ted Motohashi, “Cannibals and Traders: The Discourse of Cannibalism in Sumatra and the Andaman Islands”, 『人文学報』第364号、東京都立大学人文学部、2005年、27-42頁。
- 10) インド高等医官制度、および彼らとインドの監獄制度との関係については、以下の著書を参照されたい。脇村孝平『飢餓・疫病・植民地統治—開発の中の英領インド』、名古屋大学出版会、2002年、とくに206-207頁。David Arnold, *Colonizing the Body: State Medicine and Epidemic Disease in Nineteenth-Century India*, University of California Press, 1993, pp. 98-113; “The Colonial Prison: Power, Knowledge and Penology in Nineteenth-Century India”, *A Subaltern Studies Reader 1986-1995*, ed., Ranajit Guha, Oxford University Press, 1998, pp. 140-178.
- 11) 藤井毅『歴史の中のカースト—近代インドの<自画像>』、岩波書店、2003年、59-61頁。Arjun Appadurai, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, University of Minnesota Press, 1996, pp. 114-135. とりわけ、後者では「植民地という／にある身体」の計量化をめぐる一節を参照されたい。
- 12) “Andaman Islands”, *The Imperial Gazetteer of India*, ed., W.W. Hunter, vol. I, Trübner & Co., 1881, pp. 194-198. 同項目に関してはこの初版の記述が基盤になっており、第2版では現地の最新情報が若干追加されているにすぎない。
- 13) L. P. Mathur, *History of The Andaman and Nicobar Islands (1756-1966)*, Sterling Publishers, 1968, pp. 44-59.
- 14) *Selections from the Records of the Government of India (Home Department). No. XXV. The Andaman Islands; with Notes on Barren Island*, Baptist Mission Press, 1859.
- 15) Frederic J. Mouat, *Adventures and Researches Among The Andaman Islanders*, Hurst and Blackett, 1863 (reprint: Kissinger Publishing, 2010).
- 16) 収監された独立運動の闘士に関しては、たとえば、次のガイドブックの長大なリストなどを参照されたい。Priten Roy and Swapnesh Choudhury, *Cellular Jail: Cells Beyond Cells*, Farsight Publishers & Distributors, 2001.
- 17) M. V. Portman, *A History of Our Relations with The Andamanese*, Office of the Superintendent of Government Printing, 1899 (reprint: Asian Educational Service, 1990), pp. 373-481. ここでは島民の保護・同化・教育がまず何よりも彼らの拉致監禁から出発していたことが明瞭にされている。
- 18) ムートの公式報告書では、この点について次のように記されている。「彼らの無愛想さや異邦人に対する冷酷な敵意が、彼らに帰せられた食人種の噂と相まったために、その岸辺に近づいた者は彼らのことを一様に恐怖と嫌悪をもって見つめるようになったのである」(F. J. Mouat, “Preface”, *Selections from Records*, p. vi)。「食人種の実在に関しては、我々はいかなるかたちであれ、また我々が調査したいかなる場所であれ、その痕跡を一切見出していない」(p. xiii)。
- 19) R. H. Colebrooke, “On the Andaman Islands”, *Asiatic Researches* IV, 1807, pp. 405.
- 20) J. H. Stocqueler, *Oriental Interpreter and Treasure of East India Knowledge: A companion to “The*

- hand-book of British India*”, London: C. Cox, 1848, pp. 10-11.
- 21) Claire Wintle, “Model Subjects: Representations of the Andaman Islands at the Colonial and Indian Exhibition, 1886”, *History Workshop Journal*, vol. 67, 2009, pp. 194-207.
 - 22) 「今回の輝かしき帝国博覧会は本来の国民教化の手段という価値を超え…、グレート・ブリテン、インド、その他の植民地をこれまで以上に緊密に結びつける効果をもたらし…、偉大なる連合体形成へ向けて少なからぬ寄与をなすだろう」。 *The Illustrated London News*, 17 July, 1886, p. 81.
 - 23) George Watt, “A Guide to the Ethnological Models and Exhibits Shown in the Imperial Court”, *Empire of India: Special Catalogue of Exhibits*, William Clowes & Sons, 1886, pp. 159-160.
 - 24) Wintle, “Model Subjects”, p. 196.
 - 25) Trilokya Nath Mukharji, *A Visit to Europe*, W. Newman, 1889, p. 71.
 - 26) Saloni Mathur, *India by Design: Colonial History and Cultural Display*, University of California Press, 2007. とりわけ、第1章と第2章を参照されたい。
 - 27) Mukharji, *A Visit to Europe*, p. 104.
 - 28) Wintle, “Model Subjects”, p. 198-199.
 - 29) “The Colonial and Indian Exhibition”, *The Times*, 8th Oct., 1886, p. 13.
 - 30) Tapati Guha-Thakurta, *The Making of A New ‘Indian’ Art: Artists, Aesthetics and Nationalism in Bengal, c. 1850-1920*, Cambridge University Press, 1992, pp. 70-71.
 - 31) T. N. Mukharji, *Art-Manufactures of India*, the Superintendent of Government Printing, 1888 (reprint: Bibliolife, 2010), pp. 59-69.
 - 32) G. Watt, “A Guide to the Economic and Commercial Court”, in *Empire of India*, p. 51.
 - 33) Mouat, *Adventures and Researches*, pp. 241-260. 最初の軍事的衝突はポート・コーンウォーリスの第1次入植地跡に到着した翌日の12月12日に起きたもので、その周辺にあるクレーギー島に上陸した際、住民から奇襲を受け、水兵たちが命令を無視して勝手に発砲している。彼らは何人かの住民を殺傷したと考えたが、実際に死体は発見されず、ムートは彼らの銃の腕前に辛辣な態度を取っている (Ibid., pp. 132-134)。
 - 34) Ibid., pp. 255-56. 公式報告書には後述するジャックに関して詳細な計測結果が図表として掲載されているが、ここで述べられた2体の遺体については「同じ特徴を示していた」とふれられただけで、データは公表されていない (Mouat, “Preface”, *Selections from Records*, p. xi-xii)。身長については4フィート9.5インチとされている。
 - 35) そもそもサウス・リーフ島に上陸した背景には、帰国後に友人に見せることのできる記念品をもち帰ろうとした士官たちの欲望が働いていた。ムート自身はそれを否定するが、それでも、カルカッタ帰投後に彼らの推測が当たることになったと記している。「珍しいアンダマン土産は紹介状のように欠かすことのできないものとみなされ、それなしには彼らが望ましい客としてもてなされることはなかったからである」 (Ibid., p. 237)。
 - 36) Ibid., pp. 283.
 - 37) R. Owen, “On the Psychical and Physical Characters of the Mincopies, or Natives of the Andaman Islands, and on the Relations thereby indicated to other Races of Mankind”, *Report of the thirty-first meeting of the British Association for the Advancement of Science*, 1862, pp. 241-249; “On the Osteology and Dentition of the Aborigines of the Andaman Islands, and the Relations Thereby Indicated to Other Races of Mankind”, *Transactions of the Ethnological Society of London*, Vol. 2, 1863, pp. 34-49.
 - 38) *Calcutta Monthly Register, or, India Repository, of Instruction and Entertainment*, November 1790 (reprint: Gale ECCO Print Editions), p. 17.
 - 39) Owen, “On the Psychical and Physical Characters”, pp. 247-248.
 - 40) Ibid., pp. 249.
 - 41) オーエンの最近の再評価については以下の著書の第8章「オーエンと進化論」を参照されたい。松永俊男『ダーウィン前夜の進化論争』、名古屋大学出版会、2005年。また、ハクスリーの進化図式が人種主義的な側面をもつことについては、次のオーエンの伝記を参照されたい。Nicolaas A. Rupke, *Richard Owen:*

- Biology without Darwin, a Revised Edition*, the University of Chicago Press, 2009, p. 196.
- 42) “Pygmies”, *The Times*, 11 Jan., 1889, p. 7.
- 43) 見市雅俊『コレラの世界史』、晶文社、1994年、210頁以下。
- 44) William Henry Flower, “Additional Observations on the Osteology of the Natives of the Andaman Islands”, *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, vol. 14, 1885, pp. 115-120; “The Pygmy Races of Men”, *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, vol. 18, 1889, pp. 73-91.
- 45) W. H. Flower, “Stature of the Andamanese”, *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, vol. 10, 1881, p. 124.
- 46) E. S. Brander, “Remarks on the Aborigines of the Andaman Islands”, *Proceedings of the Royal Society of Edinburgh*, vol. 10, no. 106, 1878-79, pp.415-424.
- 47) D. L. Gardner, M. F. Macnicol, P. Endicott, D. R. T. Rayner and P. Geissler, “A little-known aspect of Arthur Conan Doyle (1859-1930): the call of India and a debt to Walter Scott (1771-1832)”, *Journal of Medical Biography*, vol. 17, 2009, pp. 2-7.
- 48) E. S. Brander, “Remarks on the Aborigines”, p. 422.
- 49) コナン・ドイル『わが思い出と冒険—コナン・ドイル自伝』、新潮文庫、1965年、95-97頁。
- 50) 同書、17頁。
- 51) A. C. Doyle, “Juvenilia”, *My First Book*, ed., Jerome K. Jerome, CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013, pp. 88-96. 同じ記憶はドイルの自伝でも語られている。『わが思い出と冒険』、17頁。
- 52) リードの作品は日本でも1899年に翻訳が出版されている。櫻井鷗村訳『勇少年冒険譚 初航海』、文武堂、明治32年。
- 53) Captain Mayne Reid, *Odd People: being A Popular Description of Singular Races of Man*, Routledge, 1860.
- 54) M. Symes, *An Account of an Embassy to the Kingdom of Ava, in the Year 1795*, vol.1, Edinburgh, 1827, pp. 150-165.
- 55) Reid, *Odd People*, p. 392.
- 56) 神宮輝夫『世界児童文学案内—誕生から世界的発展期まで』、理論社、1976年、67-68頁。
- 57) Reid, *Odd People*, p. 396.
- 58) *Ibid.*, p. 399.
- 59) Symes, *An Account of an Embassy*, p. 157.
- 60) すでに述べたように、ブレンダーの寄贈した標本の身長は137センチしかなく、彼が現地で計測した女性のなかでも低い部類に入る。ちなみに、リードとポーは友人関係にあり、2年間にわたってフィラデルフィアで友情を育んだという。Elizabeth Reid, *Captain Mayne Reid*, Greening, 1900 (reprint: Bibliolife, 2009), pp. 21-28.
- 61) Reid, *Odd People*, pp. 196-197, 215.
- 62) この仮説からするならば、トンガがアンダマン人の使わない毒の吹き矢を使うとされていることも納得がゆく。リードの著作には毒矢を使う「アマゾンのインディアン」たちのことも一章を費やして語られているからである。*Ibid.*, pp. 56-60.
- 63) ラナジット・グハ「反乱鎮圧の文章」、R. グハ／G. パーナー／P. チャタジー／G. スピヴァック『サバルタンの歴史—インド史の脱構築』所収、竹中千春訳、岩波書店、1998年、25-99頁。
- 64) 『ベアリング・グールド詳注版 シャーロック・ホームズ全集』第5巻、269-270頁。

(本学文学部准教授)